Japanese Association of Educational Psychology

550 教育心理学研究, 2007, 55, 550—559

中学生の心理的ストレスと相互独立性・相互協調性との関連

奥野誠一* 小林正幸**

本研究の目的は，中学生の心理的ストレス反応尺度を構成し，相互独立性・相互協調性との関連を明らかにすることであった。中学生1,112名を対象とし，相互独立性・相互協調性との関連を検討したところ，以下の点が明らかになった。(1)言語的主張の高さとストレス反応の低さには関連があること，(2)評価懸念の高さとストレス反応の高さには関連があること，(3)相互独立性・相互協調性の組み合わせパターンにより解釈可能な4群が抽出された，(4)相互協調性優勢群は他の群に比べてストレスが高い。以上の結果より，相互協調性優勢群の子どもに対する援助の重要性が示唆された。

キーワード：相互独立性・相互協調性，心理的ストレス，中学生

問　題

不登校児童生徒数は，平成14年度には13万9千人にも上り，平成15年度には若干減少したものの，その出現率は相変わらず高いといえよう（文部科学省, 2003)。一方，登校はしているものの，学校不適応感や学校回避感情を抱える「グレイゾーン」の子どもの存在も指摘されている（古市, 1991；森田, 1991など)。

早川・小林（2006）は，中学生を対象として，欠席日数の予測因について検討している。その結果，欠席日数の多さとストレス反応の高さには，一定の関連があることを示している。学校ストレスに関する研究(三浦, 2002；嶋田, 1998など）では，学校ストレッサーによってストレス反応が引き起こされ，両者の間には一定の関係があることが示されている。

学校ストレッサーに関する研究では，長根（1991）は，小学生には，「友人関係」「授業中の発表」「学業成績」「失敗」が主な学校ストレッサーとして存在することを示している。岡安ら（1992）や三浦（2002）は中学生，嶋田（1998）は小中学生をそれぞれ対象として，日常の生活場面において，ストレス度の高い出来事をどの程度経験しているのかについて検討し，「先生との関係」「友人関係」「学業」（小・中学生共通)，「叱責」（小学生)「部活動」(中学生)といった学校ストレッサーが存在することを確認している。

ストレス反応に関する研究では，嶋田ら（1994）や嶋田ら（1992）は小学生，岡安ら（1992）は中学生，をそれぞれ対象として，小学生用・中学生用ストレス反応尺度を開発し，小中学生ともに「身体的反応」(身体的反応)「抑うつ・不安反応」「不機嫌・怒り反応」（情動的反応)「無気力反応」（認知行動的反応）といったほぼ同様の4因子を抽出している。これらのストレス反応が高い場合には学校不適応感も高くなることが明らかにされている（三浦, 2002；嶋田, 1998など)。

学校ストレッサーとストレス反応との関連について検討したものでは，小中学生を対象とした嶋田ら(1992)や岡安ら（1992）の研究がある。これらの研究は，学校ストレッサーの中でも「友人関係」は「抑うつ・不安」を中心にすべてのストレス反応に影響を及ぼすことを示している。現代教育研究会（2001）は，2万人を超える不登校体験者を対象として全国調査を行い，不登校のきっかけとして友人関係をあげたものが約45%であったことを明らかにしている。

このように，不登校状態の生徒にとっても，登校している生徒にとっても，友人関係はストレッサーとなりやすいことが示唆される。森田（1991）は，このような背景の一つとして，「私事化（privatization)」によって，日本社会が自己を重視する価値観が強まったことをあげている。一方で，森田（2003）によれば，私事化社会で育つ子どもたちは，他者の視線を過剰に気にしたり，友だちの意見にいたずらに同調したりしようとする傾向があることを指摘している。他者からの評価を気にすることを指す評価懸念の高さと，不安および無気力傾向との間には関連が見られることも指摘されている（桜井, 1995；山本・田上, 2001)。

学校は多様な人間関係が展開される場である。その中では，自分の意見や考えを主張し，主体的に行動することが求められる。その一方で，ある程度自分を抑

* 立正大学心理学部
s-okuno@ris.ac.jp
** 東京学芸大学教育実践研究支援センター
VFF06175@nifty.ne.jp

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

え，他者に合わせながら行動する必要がある。上記の先行研究からは，中学生の友人関係に配慮することで学校不適応の予防につながる可能性が示唆される。

このような観点から考えると，個人および集団での行動傾向という視点から子どもをとらえることによって，その特徴に応じたアプローチが明らかになれば，集団に属することについてストレス反応の高い生徒に対する理解を深め，支援に役立つ知見が得られるのではないだろうか。

このような行動傾向を測定するために，本研究では相互独立性・相互協調性という概念を用いる。

これは，「文化的自己観（cultural views of self）」を個人内に援用したものである。文化的自己観は，ある文化において暗黙に共有され，人々の思考，感情，社会的行動に影響を及ぼすとされている（北山・唐澤, 1995）。文化的自己観には，「相互独立的自己観（independent construal of self）」「相互協調的自己観（interdependent construal of self）」があげられている（Markus & Kitayama, 1991）。相互独立的自己観は，自己を他者から切り離し，個性的・自立的であることを重視する。これに対して，相互協調的自己観とは，自己と他者との協調的関係を重視する。相互独立的自己観は，西欧・北米の文化に特有であり，相互協調的自己観は東洋文化に特有であるとされている（北山・唐澤, 1995）。

Singelis(1994)は，これらの2つの自己観が個人内に両立しうるものであることを示唆し，これらの自己観を測定する尺度を作成した。わが国においても，相互独立性・相互協調性は個人内に存在しうるとして研究がなされている（木内, 1995；木内, 1997；三枚, 1998；高田, 1999, 2002, 2003など）。これらの立場では，個人内において相対的に優勢な自己観が個人の行動を規定すると仮定している。さらに，高田(1999)は，“相互独立性と相互協調性は相対的に独立している可能性がある（p. 481）”としている。このような観点から，高田・大本・清家(1996)は，「独断性」「個の主張・認識」「評価懸念」「他者への親和・順応」の4因子からなる尺度を作成した。前の2因子が相互独立的自己観，後ろの2因子が相互協調的自己観を表現している。高田（1999）は，この尺度に対応する形で児童・生徒用の相互独立―相互協調的自己観尺度を作成し，文化間比較や発達的検討をしている。奥野・小林（2005）も，高田（1999）をもとに小中学生版の尺度を作成している。

相互独立性・相互協調性とストレスとの関連を示唆する研究もいくつかなされている。たとえば，木内（1997）は，女子大学生とその母親を対象として，相互独立・相互協調的自己観と状況別の葛藤について検討している。その結果，女子学生と母親ともに，個人の中で優勢な自己観と異なる行動を求められると葛藤を感じやすくなることが示されている。学校生活では，優勢な自己観と異なる行動を求められることは多く，相互独立性・相互協調性の視点からストレスとの関連について検討を加えることは有用であろう。

一方，高田(2003)は，成人を対象とし，相互独立性・相互協調性と有能感との関連について検討し，類型化を試みている。その結果，①相互独立性優勢型（相互独立性高・相互協調性低），②独立性・協調性拮抗型（相互独立性・相互協調性がともに高），③相互協調性優勢型（相互協調性低・相互協調性高），の3類型が抽出された。相互独立性優勢型と独立性・協調性拮抗型は肯定的自己認識が高く，相互協調性優勢型は批判的自己認識が高いという特徴が見られたことが示されている。

高田（2003）からは，相互独立性の高さは肯定的な自己認識につながり，相互協調性は否定的な自己認識につながることが示唆される。一般に，肯定的に自己をとらえる場合には，精神的な健康度は高いと考えられている。そのため，肯定的な自己認識が高いとストレス反応は低く，否定的な自己認識が高いとストレス反応が高いことが予想される。相互独立性・相互協調性という視点から，中学生の個人と集団での行動傾向をとらえることは，その特徴に応じた早期発見・早期対応のための示唆を得ることにつながり，有意義なのではないかと考えられる。

しかしながら，これまでの研究では，相互独立性・相互協調性に関する研究のほとんどが成人を対象としたものであり，中学生を対象としたものは少ない。中学生が対象に含まれていても，文化間比較や発達的検討が中心であり，相互独立性・相互協調性という観点からストレスとの関連を直接検討したものはまだ見られない。

目的

そこで，本研究では，相互独立性・相互協調性と心理的ストレス反応との関連を明らかにし，相互独立性・相互協調性の組み合わせによる心理的ストレス反応の相違を明らかにすることを目的とする。

具体的には，①中学生用心理的ストレス反応尺度を構成し，相互独立性・相互協調性との関連を検討する。

②相互独立性・相互協調性の組み合わせパターンを抽出し，心理的ストレス反応の相違を明らかにする。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

方　法

対象

東京・神奈川・埼玉の公立中学校生徒1,112名を対象とした。有効回答は，1,089名(男子544名,女子543名,不明2名）であった。

同一個人内に欠損値が多いことは，その個人の調査全体の回答の信頼性を低める可能性があると考えられる。したがって，本研究では，欠損値が2割以上の場合を無効とした。この基準は，各6項目からなる4つの下位尺度のうち，2項目（約3割）以上に不備のある回答を分析対象から除外した岡安・高山（2000）の研究を参考にして設定した。

質問紙の構成

①中学生用ストレス反応尺度　岡安ら（1992）や嶋田ら（1994）などの小学生用ストレス反応尺度および中学生用ストレス反応尺度を参考に項目を収集した。最終的には20項目を設定した。岡安ら(1992)や嶋田ら(1994)と同様，情動的反応として「抑うつ・不安」「怒り」，身体的反応として「身体症状」，認知行動的反応として「無気力」を仮定した。「よくあてはまる」「すこしあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」の5件法により回答を得た。順に5点～1点を与え，得点が高くなるほど各ストレス反応が高いことを表している。

②中学生版相互独立性―相互協調性尺度　奥野・小林（2005）の4因子版尺度を用いた。この尺度は，高田（1999）を参考に構成されたものである。相互独立性を示す「言語的主張」「自己重視傾向」，相互協調性を示す「他者重視傾向」「評価懸念」の4因子から測定する尺度である。13項目からなり，「よくあてはまる」「すこしあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」の5件法により回答を得た。順に5点～1点を与え，得点が高いほど各下位領域の傾向の高さを示している。因子分析(最小2乗法；プロマックス回転）の結果，奥野・小林（2005）と同様の構造であることが確認された（Table 1参照)。なお，抽出された4因子を外生的潜在変数，各因子に含まれた13項目を内生的観測変数とした確認的因子分析を行ったところ，$\chi^2=252.115$（$df=59$, $p<.01$)，GFI＝.960，AGFI＝.939，RMSEA＝.057であった。

手続き

担任の監督のもと，学級での一斉実施による質問紙調査を行った。なお，調査期間は，2003年7月～11月であった。

結　果

心理的ストレス反応尺度の構造

心理的ストレス反応尺度の因子構造について検討するため，一般化された最小2乗法による因子分析(プロマックス回転）を行った。①I-T相関が.40未満のもの，

Table 1　中学生用相互独立性・相互協調性尺度の因子パターン

質問項目	抽出因子 言語的主張 α=.744	他者重視傾向 α=.676	自己重視傾向 α=.686	評価懸念 α=.716	共通性
10 自分の意見をはっきり言う	.746	-.011	.055	.027	.605
12 いつも自信を持って発表している	.737	.090	-.046	-.113	.488
1 いつも自分の意見を持つようにしている	.576	-.133	.052	.090	.441
11 意見が分かれたときは友だちに合わせる	-.009	.776	.067	-.071	.535
13 誰と一緒かで，考えややり方が変わる	.029	.534	.055	.083	.329
6 何かを決定するとき,自分で決めるよりも他の人たちに決めてもらいたいと思う	-.188	.516	.104	.016	.337
9 みんなと意見が分かれるのはいやだ	.153	.485	-.238	.114	.412
8 考えややり方が友だちと違っても気にならない	.030	.046	.715	.010	.509
7 したいことがあると，周りから外れても，したいことをする	-.069	.045	.652	.098	.344
3 自分の考えを友だちが何と思っても気にしない	.075	.084	.480	-.192	.355
5 みんなと違っても，自分が考えたとおりにやる	.185	-.094	.451	.054	.377
4 周りの目が気になる	-.053	-.027	.106	.830	.625
2 グループから離れると，どう思われるか気になる	.048	.108	-.095	.645	.547
2乗和	2.169	2.210	2.279	1.731	

（最小2乗法；プロマックス回転）

注）因子負荷量が.40以上は四角で囲んである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

②いずれの因子にも負荷が.30未満のもの，③いずれの因子にも負荷が.40以上のもの，を削除する基準とした。該当する項目をその都度削除し，繰り返し因子分析を行った。その結果，4因子18項目が抽出された（TABLE 2）。第1因子を「怒り」（α=.931），第2因子を「抑うつ・不安」（α=.908），第3因子を「身体症状」（α=.864），第4因子を「無気力」（α=.810）と命名した。

この結果は岡安ら（1992）の尺度にほぼ対応した因子構造であると考えられる。α係数もそれぞれ満足のいく値が得られ，信頼性は確かめられたといえよう。次に，抽出された4因子を外生的潜在係数，各因子に含まれた合計18項目を内生的観測変数とする確認的因子分析を行った。その結果，χ^2=796.407（df=129, p<.01），GFI=.920, AGFI=.894, RMSEA=.071であった。RMSEA値が.50を上回ったものの，GFIの値が.90を上回り，十分とは言い難いが本尺度のモデル適合は概ね妥当であったといえよう。

心理的ストレス反応と相互独立性・相互協調性との関連

ストレス反応尺度のみ回答した対象者が存在するため，相互独立性—相互協調性尺度および心理的ストレス反応尺度とも有効回答の者のみで因子分析を行い，同様の因子構造であることを確認した。そのため，この因子分析をもとに因子得点を算出し，分析に用いた。各尺度の因子得点の記述統計量を，TABLE 3，TABLE 4に示した。

心理的ストレス反応と相互独立性・相互協調性との間に関連がみられるかどうかを検討するため，相互独立性・相互協調性の4因子「言語的主張」「自己重視傾向」「他者重視傾向」「評価懸念」を説明変数，心理的ストレス反応の各4因子を予測変数とした重回帰分析を行った。奥野・小林（2005）では，評価懸念において性差があることが示されているため，全体と性別ごとにそれぞれ分析を行った。

その結果をTABLE 5に示した。全体的に，言語的主張が高い場合ほどストレス反応は低く，評価懸念が高い場合ほどストレス反応は高い傾向が示された。とくに，男女とも評価懸念の高さと抑うつ・不安の高さとの関連は強い傾向が示唆された。また，男子の場合，自己重視傾向は相関係数では無相関であった（APPENDIX参照）が，β値は有意であった。このことより，自己重視傾向は抑制変数であると考えられた。すなわち，自己重視傾向については他の変数も考慮に入れると相対的にストレス反応を高めることが示唆された。

相互独立性・相互協調性パターンの抽出

次に，相互独立性と相互協調性得点パターンについ

TABLE 2 中学生用心理的ストレス反応尺度の因子パターン

質問項目	抽出因子 怒り α=.931	抑うつ・不安 α=.908	身体症状 α=.864	無気力 α=.810	共通性
14 怒りを感じる	.991	.009	-.045	-.057	.885
13 いらいらする	.929	-.024	-.001	.005	.851
12 だれかに怒りをぶつけたい	.890	-.100	.020	.008	.725
15 ふゆかいな気分だ	.677	.171	.028	.012	.724
9 気持ちがむしゃくしゃする	.525	.214	.091	.075	.698
1 かなしい	-.023	.911	-.029	-.068	.717
18 さみしい気持ちだ	.008	.903	-.088	.015	.761
5 泣きたい気分だ	-.017	.765	.127	-.084	.663
3 気持ちがしずんでいる	.041	.737	.073	.026	.726
17 不安を感じる	.046	.725	-.031	.092	.657
11 頭がくらくらする	.021	-.081	.882	.008	.726
4 頭痛がする	-.001	-.009	.850	-.100	.639
6 頭が重い	-.062	.165	.727	.045	.705
8 からだがだるい	.186	.017	.507	.111	.562
19 1つのことに集中することができない	-.029	-.013	-.016	.797	.606
20 勉強が手につかない	.026	-.105	-.044	.793	.552
10 むずかしいことを考えることができない	.036	-.010	.021	.705	.585
2 頭の回転がにぶく，考えがまとまらない	-.063	.216	.023	.582	.558
2乗和	7.179	7.400	6.609	5.446	

（最小2乗法；プロマックス回転）

注）因子負荷量が.40以上は四角で囲んである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 3 相互独立性—相互協調性尺度の因子得点

	男子	女子
言語的主張	-.022	.025
	(.8993)	(.8644)
自己重視傾向	.039	-.036
	(.8491)	(.8776)
他者重視傾向	.037	-.031
	(.8717)	(.8568)
評価懸念	-.120	.125
	(.8604)	(.8629)

値は因子得点の平均値
( )内は標準偏差を示す

TABLE 4 ストレス反応尺度の因子得点

	男子	女子
怒り	.006	-.002
	(.9929)	(.9624)
抑うつ・不安	-.107	.111
	(.9184)	(.9977)
身体症状	-.033	.035
	(.9253)	(.9673)
無気力	-.063	.067
	(.9413)	(.9018)

値は因子得点の平均値
( )内は標準偏差を示す

て検討した。「言語的主張」「他者重視傾向」「自己重視傾向」「評価懸念」の各下位尺度の素点を項目数で割った値を下位尺度得点とし，グループ内平均連結法によるクラスター分析を行った。その結果，4つのクラスター（CL1, CL2, CL3, CL4）が抽出された。析出距離の係数は，3.512であった。

この4クラスターを独立変数，「言語的主張」「他者重視傾向」「自己重視傾向」「評価懸念」得点を従属変数とした1要因分散分析を行った。その結果，いずれにおいても有意な群間差がみられた（順に，$F(3,1011)=204.332$；113.626；160.637；605.118，いずれも $p<.001$）。そこで，多重比較を行ったところ，言語的主張はCL 1≒CL 4>CL 3>CL 2であった。CL 3他者重視傾向は，CL 4よりCL 2>CL 1≒CL 3>CL 4であった。自己重視傾向はCL 4>CL 1>CL 3>CL 2であった。評価懸念はCL 1>CL 2>CL 3>CL 4であった（TABLE 6）。

以上より，各クラスターは，以下のように解釈できる。

CL 1（204名；約20.2%）：「相互独立性が高く，相互協調性も高い」群（相互独立性・相互協調性拮抗群；以下，拮抗群）

CL 2（403名；約39.8%）：「相互独立性が低く，相互協調性は高い」群（相互協調性優勢群）

TABLE 5 相互独立性・相互協調性と心理的ストレス反応との関連

全体

説明変数	予測変数 怒り	抑うつ・不安	身体症状	無気力
	β			
言語的主張	-.152***	-.194***	-.148***	-.248***
自己重視傾向	.214***	.159***	.165***	.197***
他者重視傾向	.082*	.001	.039	.120**
評価懸念	.269***	.414***	.240***	.201***
R^2	.086***	.158***	.061***	.103***

男子

説明変数	予測変数 怒り	抑うつ・不安	身体症状	無気力
	β			
言語的主張	-.182***	-.186**	-.147**	-.266***
自己重視傾向	.289***	.248***	.261***	.237***
他者重視傾向	.095	.109*	.066	.180**
評価懸念	.259***	.350***	.258***	.194***
R^2	.095***	.148***	.077***	.129***

女子

説明変数	予測変数 怒り	抑うつ・不安	身体症状	無気力
	β			
言語的主張	-.108	-.190**	-.145**	-.233***
自己重視傾向	.118	.068	.052	.136*
他者重視傾向	.053	-.088	.015	.062
評価懸念	.274***	.431***	.189**	.170***
R^2	.086***	.170***	.058***	.079***

*$p<.05$，**$p<.01$，***$p<.001$
（強制投入法による）

CL 3（288名；約28.5%）：「ほぼ平均」群（平均群）

CL 4（117名；約11.6%）：「相互独立性が高く，相互協調性は低い」群（相互独立性優勢群）

4群と心理的ストレス反応との関連について

4群ごとに心理的ストレス反応に相違がみられるかどうか検討するため，性別および4群を独立変数，心理的ストレス反応の各下位尺度得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果，「抑うつ・不安」「無気力」には性差がみられ，いずれも女子のほうが男子よりも得点が高かった。4群については，いずれにおいても有意な群間差がみられた。そこで，多重比較を行ったところ，以下のような結果が得られた（TABLE 7）。

「怒り」「抑うつ・不安」については，拮抗群・相互協調性優勢群のほうが相互独立性優勢・平均群よりも

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 6　相互独立性・相互協調性の組み合わせによる4クラスタ別の相互独立性—相互協調性得点の差

	拮抗群 (CL1)	相互協調性優勢群 (CL2)	平均群 (CL3)	相互独立性優勢群 (CL4)	F値	多重比較
言語的主張	3.81 (.556)	2.61 (.616)	3.05 (.750)	3.88 (.749)	$F(3,1011)=204.332^{***}$	{CL1,CL4}>{CL2,CL3}
自己重視傾向	3.28 (.649)	2.59 (.589)	3.02 (.619)	3.90 (.586)	$F(3,1011)=160.637^{***}$	CL4>CL1>CL3>CL2
他者重視傾向	3.08 (.778)	3.37 (.603)	3.01 (.634)	2.12 (.565)	$F(3,1011)=113.626^{***}$	CL2>{CL1,CL3}>CL4
評価懸念	4.14 (.518)	3.98 (.628)	2.48 (.639)	2.11 (.659)	$F(3,1011)=605.118^{***}$	CL1>CL2>CL3>CL4

値は下位尺度得点の平均値，(　)内は標準偏差を示す　$^{***}p<.001$

TABLE 7　相互独立性・相互協調性の組み合わせパターン別の心理的ストレス反応得点

	性別 男子	性別 女子	拮抗群	相互協調性優勢群（協優）	平均群	相互独立性優勢群（独優）	F値 性別	F値 4群	F値 性別＊4群
怒り	2.570 (1.337)	2.581 (1.291)	2.790 (1.349)	2.777 (1.301)	2.273 (1.239)	2.251 (1.277)	$F(1,1003)=0.369$ *n.s.*	$F(3,1003)=12.450^{***}$ 拮抗,協優>平均,独優	$F(3,1003)=0.213$ *n.s.*
抑うつ・不安	2.242 (1.105)	2.569 (1.237)	2.531 (1.177)	2.748 (1.192)	2.024 (1.040)	1.943 (1.085)	$F(1,1001)=8.123^{**}$ 女>男	$F(3,1001)=26.770^{***}$ 拮抗,協優>平均,独優	$F(3,1001)=1.150$ *n.s.*
身体症状	2.343 (1.154)	2.427 (1.236)	2.474 (1.221)	2.538 (1.194)	2.179 (1.118)	2.207 (1.259)	$F(1,1000)=0.131$ *n.s.*	$F(3,1000)=5.660^{**}$ 協優>平均	$F(3,1000)=0.270$ *n.s.*
無気力	2.629 (1.096)	2.799 (1.069)	2.608 (1.096)	2.947 (1.054)	2.563 (1.035)	2.466 (1.158)	$F(1,1002)=4.959^{*}$ 女>男	$F(3,1002)=10.200^{***}$ 協優>拮抗,独優,平均	$F(3,1002)=0.826$ *n.s.*

値は下位尺度得点の平均値，(　) 内は標準偏差を示す　$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$，$^{***}p<.001$

得点が高かった。このことは，拮抗群および相互協調性優勢群に属する生徒は，相互独立性優勢群および平均群に属する生徒よりも怒り感情と抑うつ・不安感情を抱いていることを示唆している。「身体症状」については，相互協調性優勢群のほうが平均群よりも得点が高かった。つまり，相互協調性優勢群に属する生徒は，平均群に属する生徒よりも身体的なストレスを抱えていることが示唆された。「無気力」については，相互協調性優勢群のほうが拮抗群・相互独立性優勢群・平均群よりも得点が高かった。これらの結果は，相互協調性優勢群に属する生徒は，他の3群に属する生徒よりも無気力反応を呈しやすいことを示している。交互作用はいずれにおいてもみられなかった。

考　　察

心理的ストレス反応と相互独立性・相互協調性との関連

本研究では，中学生用心理的ストレス反応尺度を構成し，相互独立性・相互協調性との関連について検討した。その結果，男女ともほぼ同様の傾向がみられた。すなわち，評価懸念の高さとストレス反応の高さに関連のあることが示された。また，言語的主張の高さとストレス反応の低さに関連のあることが示された。

評価懸念が高い場合ほど心理的ストレスも高くなるとの本研究の結果は，山本・田上 (2001) や桜井 (1995) の結果や，森田 (2003) の指摘を支持するものであるといえよう。また，森田 (2003) は，私事化社会における子どもは，孤立感に陥ったり自己を肯定する力が弱まったりするとしている。相互協調性の中でも，評価懸念は否定的な自己認識につながり，ストレス反応の高さと関連するのではないかと考えられる。

一方，従来，自分の意見や考えを主張し，主体的に行動するといった主張行動は社会的スキルの代表的な行動として扱われている（金子・小林・笹田, 1989 など)。内山 (1988) は，主張反応はストレス反応を低減することを指摘し，不安・イライラ，心身症，引っ込み思案などに対して，主張反応を練習する主張訓練法が有効であるとしている。本研究の言語的主張の項目では，相手に対する攻撃的要素が含まれる可能性もあり，相手の立場も慮る主張の概念とは異なる側面もある。しかしながら，本研究で言語的主張が高い場合ほど，ストレス反応が低い傾向を示したことは内山 (1988) の指

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

摘を裏打ちしているとも考えられる。

平木(1993)は自己主張することは怒りの低減につながることを示唆している。本研究では，男子には言語的主張と怒り反応との間に関連が見られたのに対し，女子の場合は言語的主張と怒りには関連が見られなかった。つまり，男子の場合には平木(1993)を支持し，女子の場合には支持しないとの結果が得られた。これには，女子中学生の人間関係の持ち方が考えられる。平木(1993)は，評価懸念の高い者は，主張ができないことによって怒り感情を溜め込むことも指摘している。本研究でも，評価懸念と怒り感情との間には関連が見られている。平木(1993)の指摘は一般成人を想定したものと考えられる。中学生では，男子よりも女子のほうが，誰とでも仲良くしようとするが本音を出さずに友だちとつきあうといった「浅く広くかかわるつきあい方」をする傾向にある(落合・佐藤,1996)。女子は，男子よりも周囲との関係に敏感であると思われ，評価懸念の影響が強いのではないだろうか。そのため，評価懸念の高さが，主張を抑制するように作用するのではないかと考えられる。このことから，女子の場合，怒りの表出を援助する際に，評価懸念に配慮したアプローチが重要であるといえよう。

相互独立性・相互協調性パターンと心理的ストレス反応との関連

次に，「言語的主張」「他者重視傾向」「自己重視傾向」「評価懸念」の得点パターンにより4群を抽出し，心理的ストレス反応の相違を検討したところ，相互協調性優勢群は全体的にストレス反応が高いことが示唆された。これに対して，相互独立性優勢群と平均群はストレス反応が比較的低いことが示唆された。

高田(2003)によれば，相互独立性が高いと肯定的自己認識が高く，相互協調性が高いと批判的自己認識が高いことが示されている。本研究で測定された相互独立性・相互協調性と自己認知との関連については今後検証する必要はある。しかしながら，高田(2003)の結果を参考にすると，相互協調性優勢群は，批判的な自己認識が強く自分の意見をあまり表現せずに，周囲に合わせて行動する群であると推測される。小林(2003)は，従来の「優等生の息切れ」型不登校は，現代では“仲間からの評価，仲間との人間関係の調整の中で他者の目を意識しながら自分を演じることに疲れ，息を切らせるものが多くな(p.26)”り，“悩んでいる部分を周囲の大人に見せられない問題へと変化した(p.26)”と述べている。また，ストレス反応の高さは学校不適応や不登校と関連することが示されている(早川・小林,2006；嶋田,1998)。このように考えると，相互協調性優勢群は，一見，教師の目からは適応しているように見受けられるかもしれないが，主張できず周囲に合わせる生徒像が推測される。まじめで周りと合わせて生活しているが，言語的主張をあまりしない場合には，ストレスを溜めている可能性があり，相互協調性優勢群の一部の生徒は学校不適応に至るリスクのある可能性が示唆される。しかしながら，相互協調性優勢群に属していても，ストレス反応も高くなく，学校不適応に至らない生徒も存在するであろう。本研究では，これらの相違について明らかにすることはできなかった。

また，拮抗群は言語的主張も高いが，ストレス反応も比較的高かった。相互協調性の高さとストレス反応の高さには関連が見られたとの結果と合わせると，評価懸念の高い場合には，ストレス反応も高い傾向があるといえよう。ただし，高田(2003)によれば，拮抗群は肯定的な自己認識が高いことが示されており，拮抗群と相互協調性優勢群では，数値上はストレス反応は高くても，認知プロセスやストレス・コーピングの仕方は異なると考えられ，この点は今後検討する必要があろう。

本研究では，主張をあまりせずに周囲に合わせている生徒の中にも学校不適応感を抱えている者も含まれる可能性もあり，注目する必要のあることが示唆されたといえよう。

今後の課題

本研究では，相互独立性・相互協調性と心理的ストレス反応との関連のみの検討であったが，各群によって認知的変数や獲得している社会的スキルは異なることが推測される。各群の特徴をより詳細に検討し，相違を明らかにすることで，各群の特徴に合わせた有効なアプローチ(たとえば，社会的スキルトレーニングやソーシャル・サポート)を明らかにすることが望まれるといえよう。その際に，行動観察やインタビュー調査等の質的な方法を組み合わせ，妥当性を高めることも必要であろう。

引用文献

古市裕一 1991 小・中学生の学校ぎらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, **24**, 123-127. (Furuichi, Y. 1991 Factors contributing to children's unwillingness to attend school. *Japanese Journal of Counseling Science*, **24**, 123-127.)

現代教育研究会(代表：森田洋司) 2001 不登校に関

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

する実態調査　平成5年度不登校生徒追跡調査報告書　文部科学省委託研究

早川恵子・小林正幸　2006　不登校の予防に関する研究（その1）―中学生の欠席日数を予測する要因の検討―　日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集, 203.

平木典子　1993　アサーション・トレーニング―さわやかな<自己表現>のために―　日本・精神技術研究所

金子幾之輔・小林正幸・笹田俊樹　1989　非主張的な児童に対する社会的技術訓練の適用効果について　カウンセリング研究, **22**, 19-25.（Kaneko, I., Kobayashi, M., & Sasada, T. 1989 Effects of social skills training on unassertive behavior of an elementary school child. *Japanese Journal of Counseling Science*, **22**, 19-25.）

北山　忍・唐澤真弓　1995　自己：文化心理学的視座　実験社会心理学研究, **35**, 133-163.（Kitayama, S., & Karasawa, M. 1995 Self : A cultural psychological perspective. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **35**, 133-163.）

木内亜紀　1995　独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討　心理学研究, **66**, 100-106.（Kiuchi, A. 1995 Construction of a scale for independent and interdependent construal of the self and its reliability and validity. *Japanese Journal of Psychology*, **66**, 100-106.）

木内亜紀　1997　女子大学生とその母親の相互独立・相互協調的自己観―質問紙法による形成要因と葛藤状況の比較検討―　教育心理学研究, **45**, 183-191.（Kiuchi, A. 1997 Independent and interdependent construal of the self, their correlates, and conflicts in female college students and their mothers. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 183-191.）

小林正幸　2003　不登校児の理解と援助―問題解決の予防とコツ　金剛出版

Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.

三枚奈穂　1998　成人女性における自我同一性感覚について―相互協調的・相互独立的自己感との関連から―　教育心理学研究, **46**, 229-239.（Misugi, N. 1998 A study on sense of ego identity in adult women : From the viewpoint of relationship with interdependent・independent construal of the self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 229-239.）

三浦正江　2002　中学生の学校生活における心理的ストレスに関する研究　風間書房

文部科学省　(2003.12.19)　生徒指導上の諸問題の現状について（概要）(http://www.Mext.go.jp/b_menu/houdou/15/12/03121902.htm). 2004.1.9 取得

森田洋司　1991　「不登校」現象の社会学　学文社

森田洋司　2003　「不登校追跡調査」から見えてきたもの　森田洋司編著　不登校―その後　不登校経験者が語る心理と行動の軌跡　教育開発研究所 Pp.1-50.

長根光男　1991　学校生活における児童の心理的ストレスの分析―小学校4，5，6年生を対象にして―　教育心理学研究, **39**, 182-185.（Nagane, M. 1991 Analysis of psychological stress in school life. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **39**, 182-185.）

落合良行・佐藤有耕　1996　青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究, **44**, 55-65.（Ochiai, Y., & Satoh, Y. 1996 The developmental change of friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **44**, 55-65.）

岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二　1992　中学生用ストレス反応尺度の作成の試み　早稲田大学人間科学研究, **5**, 23-29.（Okayasu, T., Shimada, H., & Sakano, Y. 1992 Development of stress response scale for junior high school students. *Waseda Studies in Human Sciences*, **5**, 23-29.）

岡安孝弘・嶋田洋徳・丹波洋子・森　俊夫・矢富直美　1992　中学生の学校ストレッサー評価とストレス反応との関係　心理学研究, **63**, 310-318.（Okayasu, T., Shimada, H., Niwa, Y., Mori, T., & Yatomi, N. 1992 The relationship between evaluation of school stressors and stress responses in junior high school students. *Japanese Journal of Psychology*, **63**, 310-318.）

岡安孝弘・高山　巌　2000　中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス　教育心理学研究, **48**, 410-421.（Okayasu, T., & Takayama, I. 2000 Psychological stress of victims and

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

bullies in junior high school. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 410-421.)

奥野誠一・小林正幸 2005 小中学生版／相互独立性—相互協調性尺度の作成 東京学芸大学附属教育実践研究支援センター紀要, **1**, 3-12. (Okuno, S., & Kobayashi, M. 2005 Construction of Independent and Interdependent Self-Construal Scale for Elementary and Junior High School Pupils : Examination of reliability and validity. *Bulletin of the Center for the Research and Support of Educational Practice*, **1**, 3-12.)

桜井茂男 1995 「無気力」の教育社会心理学 風間書房

嶋田洋徳 1998 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房

嶋田洋徳・岡安孝弘・坂野雄二 1992 児童における心理的学校ストレス尺度の開発 日本行動療法学会第18回大会発表論文集, 28-29.

嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1994 小学生用ストレス反応尺度の開発 健康心理学研究, **7(2)**, 46-58. (Shimada, H., Togasaki, Y., & Sakano, Y. 1994 Development of stress response scale for children. *Japanese Journal of Health Psychology*, **7(2)**, 46-58.)

Singelis, T. M. 1994 The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 580-591.

高田利武 1999 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討— 教育心理学研究, **47**, 480-489. (Takata, T. 1999 Developmental process of independent and interdependent self-construal in Japanese culture : Cross-cultural and cross-sectional analysis. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 480-489.)

高田利武 2002 社会的比較における自己卑下傾向と相互独立性-相互協調性との関連—文化間変動と文化内変動は並行するか？— 奈良大学紀要, **30**, 97-107. (Takata, T. 2002 Relationship between independent/interdependent self-construal and the self-critical comparison. *Memoirs of Nara University*, **30**, 97-107.)

高田利武 2003 日本人成人の相互独立性—クラスタ分析による類型的理解の試み— 奈良大学紀要, **31**, 213-233. (Takata, T. 2003 The independent self characterizing Japanese adults : A relative taxonomy based on cluster analysis. *Memoirs of Nara University*, **31**, 213-233.)

高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立的—相互協調的自己観尺度（改訂版）の作成 奈良大学紀要, **24**, 157-173. (Takata, T., Omoto, M., & Seike, M. 1996 Construction of a revised scale for independent and interdependent construal of self. *Memoirs of Nara University*, **24**, 157-173.)

内山喜久雄 1988 行動療法 日本文化科学社

山本淳子・田上不二夫 2001 評価懸念に関する文献研究と今後の課題 教育相談研究, **39**, 37-46. (Yamamoto, J., & Tagami, F. 2001 A review on fear of negative evaluation. *Bulletin of Counseling and School Psychology*, **39**, 37-46.)

(2006.6.26 受稿, '07.7.21 受理)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

APPENDIX 相互独立性・相互協調性と心理的ストレス反応との単相関

全体

	怒り	抑うつ・不安	身体症状	無気力
言語的主張	-.089**	-.143***	-.092**	-.206***
自己重視傾向	-.036	-.138***	-.048	-.101***
他者重視傾向	.193***	.241***	.157***	.245***
評価懸念	.238***	.366***	.206***	.210***

男子

	怒り	抑うつ・不安	身体症状	無気力
言語的主張	-.055	-.086*	-.024	-.205***
自己重視傾向	.053	-.028	.060	-.065
他者重視傾向	.169***	.250***	.135**	.279***
評価懸念	.206***	.318***	.195***	.202***

女子

	怒り	抑うつ・不安	身体症状	無気力
言語的主張	-.130**	-.211***	-.167***	-.221***
自己重視傾向	-.128**	-.233***	-.149***	-.139**
他者重視傾向	.214***	.240***	.177***	.210***
評価懸念	.274***	.388***	.207***	.196***

$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

Independent/Interdependent Self-Construal and Psychological Stress : Junior High School Students

SEIICHI OKUNO (FACULTY OF PSYCHOLOGY, RISSHO UNIVERSITY) AND MASAYUKI KOBAYASHI (CENTER FOR THE RESEARCH AND SUPPORT OF EDUCATIONAL PRACTICE, TOKYO GAKUGEI UNIVERSITY) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2007, 55, 550—559*

The present study reports construction of scales for assessing psychological stress responses in junior high school students. The relation between stress responses and independent/interdependent self-construal was examined. Junior high school students ($N=1,112$) answered 2 questionnaires : a Psychological Stress Responses Scale, and an Independent and Interdependent Self-Construal Scale. The results were as follows : (1) a high score on assertiveness was related to a low score on almost all stress measures ; (2) a high score on fear of negative evaluation was related to a high score on stress responses, (3) based on a cluster analysis, students could be categorized into 4 groups, and (4) the interdependence-predominant group had higher stress response scores than the other groups.

Key Words : independent and interdependent self-construal, psychological stress, junior high school students

NII-Electronic Library Service